ロマン主義の光芒

堤　博美*

要旨

ヘルダリーンはロマン主義的詩人だった。しかし彼はいわゆる初期ロマン派の人々とは没交渉に、生涯ひとり孤高孤独な道を歩いた。親しい僅かな友人たちの他は、彼の存在も知らず、その作品もほとんど読まれなかった。不幸な精神の昏迷をきたした後に、彼は再発見され、その作品がまとめて出版される機運が芽生えた。そしてこの悲劇的詩人に正当な歴史的評価がなされるのは、二十世紀に入ってからである。今日では世界的詩人としての彼の地位は不動である。ところでヘルダリーンはしばしば愛の詩人、自然の詩人と称揚される。何故か。それは畢竟するに、彼の作品の底に愛と自然が伏流するからである。もとより愛と自然という二つの概念の背後には、母への愛、女性への愛、大地への愛、自然への愛、ひいては人間（人事万端を含む）と自然（宇宙万象を含む）との複雑な関係が隠顕している。この小論では、ヘルダリーンの作品、書簡集、および彼をめぐる人々の証言を典拠として、才能と気質、運命と予感、ヒュペーリオンとディオティーマ、モラルと文体という四つの視点から、詩人ヘルダリーンの核心に参究したい。

一　才能と気質

フリードリヒ・ヘルダリーンは一七七〇年三月二十日、ドイツ南西部シュワーベン地方の小さな町ラウフェンに生まれた。父三十四歳、母二十二歳で長男だった。しかし僧院執事の父親はその二年後に病死した。死後六週間目に妹が生まれた。二年の寡婦生活の後、二十六歳の母は亡父の友人と再婚した。二年後異父弟が誕生した。ところが継父もまたヘルダリーンが九歳の時に三十四歳の若さで急死した。以後祖母、母、妹、弟のつましい家庭の中で彼は成長した。牧師の娘である母は敬虔で、愛情深く、忍耐強い女性だった。大黒柱のいない家庭は決して裕福ではなかったが、彼は祖母と母の愛情に包まれて、恰も支え棒のない一本の葡萄の若木のように成長した。九歳で地元のラテン語学校に入学して古典語を習い始め、十四歳から十八歳まで僧院学校に学び、一七八八年の秋テュービンゲン大学神学部に入学した。翌年フランス革命が勃発し、ヨーロッパを激動と騒乱の渦に巻き込んでゆくとともに、ヘルダリーンの青春にも疾風怒涛を誘発した。ノヴァーリスを含めた初期ロマン主義の誕生に関しては、この革命の洗礼を抜きにしては何も語れないだろう。

ヘルダリーンの生い立ちを簡約すれば右に尽きるが、ここで問題に

平成10年9月30日受理　*教養部

したいのは、幼少時のヘルダリーンの魂の基盤となった彼の素質である。何故か。それは一人の傑出した詩人の構想力は一体何処に根差すのか、という疑問に発する。誰もが詩人になりたくてもなれないのは自明の理だ。では詩人になれるのは何に基づくのか。答えは極めて簡単である。素質と体験に基づく。ここではとりあえず素質に限定して論ずることにしよう。素質は肉体的なものと精神的なものから成り立つ。前者を体質と呼び、後者を気質と称する。ではヘルダリーンの肉体的特徴はどうであったか。その外見容姿についてはかつての学友と同時代人の証言がある。

（学生達の催す演奏会で）ヘルダリーンは第一ヴァイオリンを奏した。私は第一ソプラノ担当として彼の間近い場所に立っていた。彼の整った顔立ち、柔和な表情、美しい姿態、手入れの行き届いた清潔な服装。そしてその容貌全体にただよう紛うかたない高貴さが今もあざやかに私の記憶に残っている。

深くて燃えるような美しい眼、秀でた額、謙遜で精神力にあふれた抗しがたい魅力のある表情。

二十二歳の頃のヘルダリーンの肖像画が今も残っている。それを見れば、彼が容姿典雅で気品ある美青年だったことは疑いない。かてて加えて、背が高く、ほっそりとして、恰好がよかった。容貌はその持ち主を何人にも推薦するという俚諺があるが、ヘルダリーンの場合も例外ではない。事実、シラーも閨秀シャルロッテ・フォン・カルプ夫人に家庭教師として推薦する書簡の中で、彼の外見はきっとあなたのお気に入ることと思います、と書き添えている。ゲーテもシラー宛の書面の中で、昨日ヘルダリーンも拙宅を訪ねてきました。彼はどこか悄然として病身のように見えましたが、実に好感がもてて、謙虚で、いかにも頼りなげながら、率直な人柄です、と付記している。さすがはゲーテ、炯眼である。すこぶる人好きのする容姿の裏に潜む繊細な精神を見抜いている。では彼の気質はどうであろうか。それについてはヘルダリーン自身の自己観察に注目してみよう。以下に彼の書簡集から適宜に抄録する。

僕はかつてはとても内気で控え目だった。

僕は生まれつき何でも生真面目に受け止める。

僕の生来の多感さ。僕のふさぎの虫や気まぐれ。

僕は少年時代の柔らかい心の素質を今なお持っている。

僕には優しい心の反面、粗暴な点もあり、よく憤激する。

僕は腹立ちまぎれに危うく皿を壁に投げ付けそうになった。

僕のように愚痴ぽくて陰気で病弱な人間。

こうした発言には自虐的な誇張表現も看取されるが、「変わり者で、繊細過ぎて憂鬱」とか「危険な憂鬱屋」といった他者の厳しい評価と重なり合う面があるのも確かであろう。こうした気質は、では何処に由来するのか。ルードルフ・シュタイナーの洞察（『教育講座Ⅱ』高橋　巌訳　筑摩書房　一九八九年）によれば、それは各人の精神的本質と遺伝とが出会い、相互に影響し合って形成されるものである。ところで人間の気質はギリシアのヒポクラテス以来、憂鬱質、胆汁質、

多血質、粘液質の四つの基本類型に分類されてきた。そして各気質にはそれぞれ共通した心理的並びに身体的特徴がある。それをここで若干例示しよう。

憂鬱質は内向的で、真面目で、沈着な性質で、肉体的にはほっそりした痩せ形、胆汁質は活発で、外界に積極的に対応するが、落ち着きに欠け、時として暴力的な行動が目立ち、体型的には太って頭が体に埋まったようなタイプ、多血質は何にでも関心を示すが、気分屋で、持続力に欠け、肉体的にはごく普通の体形である。粘液質は外界への関心が薄く、注意力も散漫で、持続力にも乏しく、体形は肩の張ったがっしり形である。こうした分類と諸特徴とを勘案して見た時、ヘルダリーンはそもそもどれに属するであろうか。体形は明らかに、ほっそりと背が高い痩せ形であるから、憂鬱質のタイプである。ところがその心的特徴はその類型の枠をはみ出して、胆汁質や多血質の特徴である暴力的要素や気分屋の面も併せ持つ。これは一体どういうことか。余りに矛盾してはいないだろうか。確かにそうだ。だが、ここでまた但し書きが必要になる。それは、人間は全く複雑極まりない存在だ、ということである。一人の人間の中には種々雑多な要素が不思議な具合に混在している。しかも卓越した人間ほどその可能性が高いのである。人間は肉体的には頭と胸と胴と四肢から成り立っているが、それらは互いに連結し合っていて、それをばらばらに切り離しては生命は維持しえない。頭は脳を含めた中枢機能を有するが、それだけで単独で存在することはできない。胸も肺や心臓を含む人体の重要な部分だが、それも唯我独尊を主張できるわけではない。胴や四肢もまたしかり。人間の気質の場合もほぼ同様のことが言えるだろう。四つの気質は厳密に分離しているのではなく、互いに補い合う関係にあり、ある気質から別の気質へと移行することもあり得る。すなわち憂鬱質から胆汁質へ、胆汁質から多血質へ、多血質から粘液質へと移り得る。だから憂鬱質の人間も主として憂鬱質であるにすぎず、胆汁質の人も主として胆汁質であるにすぎない。しかもそれぞれの気質も年齢や体験によって微妙ながら洗練されたり、相互に親和性を示しつつ移行したりする可能性もある。だが概して子供は多血質的傾向が多く、若者は胆汁質的であり、大人は憂鬱質的であり、老人は多分に粘液質の傾向を有する。ところで極めて稀にだが、二つないし三つの気質が一人の人間の中に併存する場合がある。例えば、ヘルダリーンがその典型であろう。彼の幼少時は憂鬱質が優位にあった。というのは、彼の自我が子供の頃から発達していたからである。しかし彼には胆汁質の気質もある。だから自己の中の非常に強い意志を粗暴な振る舞いで表現しようとした。彼の青年期の愚行の数々も、その結果である。ヘルダリーンのそうした気質を垣間見させるような挿話を、彼の伝記者の一人が紹介しているので、それを左に採録する。

先週の火曜日、すなわち今月の十日のたそがれ時、当地の女学校助教員マイアー氏が、教会監督官である小生のもとに、次のような苦情を持ち込んだ。その話によれば、マイアー氏がミュンツ小路の坂道を下っていると、下の方から一人の奨学金受給生が上ってきてすれ違った。その時、この大学生が向かいの新しい建物のある側から、小路の反対側のマイアー氏の方へ走り寄ってくるなり、彼の帽子を頭から地面にたたき落として言うには、「いいかい、受給生の前では脱帽するのが、君の義務なんだ」と。告訴人マイアー氏はその時学生に向かって、自分はただちに監督官のもとに告訴する、と明言した。するとその学生は、よろしい、では一緒に同行しよう、と答えた。かくして両名は学生寮を抜けて監督官舎に向かったが、館の下まで来て学生は袂を分かち、修道院の門の中へ入って行った。助教員はすぐさま門の下に来て、受給生の名前を誰何すると、自分は卒業予定者のヘルダリーンだ、という返事が戻ってきた。マイアー氏の言い分では、いやしくも公の学校で教鞭をとる

者にとって、かかる狼藉は名誉にかかわる一大事であると。監督官たる小生は夕食後ただちに、卒業予定者ヘルダリーンを喚問した。本人もその一件を否定せず、ただこう弁明した。大体あの助教員は普段から、どの受給生に対しても脱帽せぬのを常としているからだ、と。とはいえ、ヘルダリーンはしかしそこで礼儀正しくかつ謙虚に陳謝の意を表明した。ところであの助教員も今後、受給生に対して礼儀を欠かさないように、メークリン博士を通して注意しなければならない。

ここに出てくる受給生というのは、国の宗教局から奨学金を給付される神学生であり、当時は特別待遇のエリート学生だった。同じ神学寮で起居を共にした学友ヘーゲルやシェリングもヘルダリーン同様のエリート意識を有していたであろうことは想像に難くない。ただこうした選良の意識が相手への懲罰として具体的な行為に発現するのは、やはり稀であろう。後に本人が自省した青春の愚行の一つに過ぎないかもしれぬが、この挿話にもヘルダリーンの気質が端的に現れていると思う。ちなみに体格や性格に関して、ゲーテ晩年の格言集に次のような詩句がある。

父からは体格と真摯な生き方を、
母からは陽気な性格と物語を作る楽しさを受け継いだ。

ゲーテは自分の生涯を振り返り、自己の生き方、自己の性格、そして自己の喜びとする創作の道がどこに由来するのかを、かく凝縮して総括したが、それは単に遺伝の問題に還元されるものでは決してない。彼はそこに人知を超えた神の摂理を観取したのである。彼は続く詩節の中で、神が我を今とは別様に望まれたら、神は我を今とは別物に造りたまいしならん、と想定しているからである。これは禅の公案に言う、「思え、父母未生前」とも相通じ、自我の深奥なる本源を問うているのである。ヘルダリーンもまた深い孤独の中で、一切は神より始まることを、そして自我は無我に根差すことを痛切に感じていた。

ヘルダリーンが二歳の時に病死した実父の事は、記憶の奥底に沈んであまり思い出さなかったろうが、九歳の時に急死した継父の事は彼の幼心に刻銘された。この時の気持ちを彼は後年母親にこう述懐する。

僕には自分の生涯が、ほとんど一番昔の幼年時代までが、かなりはっきりと見え、そしていつ頃から自分の心が悲しみへの傾向を持ち始めたかも、よく分かります。僕はまだ非常によく覚えています。僕たちを慈しんでくださった二度目の父上が亡くなられた時、僕は孤児となって訳も分からない苦しみを感じ、あなたの日毎の悲しみと涙を見た時、僕の心は初めてこのような厳粛な気持ちになり、それが二度と僕から離れなくなり、そしてもちろんそれは年とともに大きくなるばかりでした。しかし僕の本質の底にも、ある明るさ、ある信仰があって、それは今でも時々胸一杯に本当の喜びとなって湧きでてきます。ただこれを表す言葉は、苦しみを表す言葉と同じに、容易には見つからないのです。

幼年時代の悲しみは、彼の心情に深く刻みこまれ、時として不意に頭をもたげてくる。長ずる及び、彼はこの悲しみの芽を自らの血で育てあげた。どんなに快活な、自信あふれる時にも、どこかに不安と不幸の影がつきまとう。彼は彼の内部の暖かいものが、日常の冷ややかな出来事によって冷却されるのを恐れる。この恐れはどこに由来するのか。それは幼い時から一切の出来事をあまりに強く激しく受け止めたことにある。この感受性、多感さが彼の幸福と不幸の源泉である。しかし彼は自分の内部のそうした資質を自覚はするが、これを変えることはできない。彼は何でも生真面目に受け止める。だからこそその

反動として、不機嫌や不平や気まぐれに見舞われ、揚げ句は突飛な愚行を繰り返す羽目になる。前述の挿話もまさに彼の真面目さの反映でなくして何であろう。

ヘルダリーンの前半生の創作活動は、彼の気質と無縁ではない。すなわち生来の憂鬱質（自分だけが特別に選ばれているという幻想を抱きつつも、絶えずメランコリーに陥りがちな内向性）の基盤の上に青少年の特質である多血質（気分屋的な多感性）と胆汁質（時として粗暴に傾きがちな情熱と持続性）が複合して、その力を発揮したと見るべきであろう。そして三十四歳以降の後半生を、憂鬱質（の異常な状態である妄想）と粘液質（の異常な状態である精神薄弱）の相互作用によって意識の昏迷の中で過ごす羽目になったのであろう。ヘルダリーンの精神的資質についてはこれまでにも多くの研究がある。特に精神医学の分野からの研究が注目されてきた。それに関しては筆者も過去にその文献を摘読し、共鳴したこともある。しかしその後、病理学的、統計学的な学説に次第に疑問を感じ始めた。そして人間認識においては古人の叡知に勝るものはないと信ずるようになった。例えば、上に援用したルードルフ・シュタイナーの人間学は医学的な知識ではなく、叡知による人間考察であり、そこに深い真理の洞察がある。筆者がヘルダリーンを二十年振りに読み返して、過去の見解の再考修正を試みるのも、半ばそのためである。

二　運命と予感

この章で筆者が方針とするのは、ヘルダリーン自身に自己を語らせることである。彼の内面の独白、あるいは告白によって彼の自画像を描出することである。それには彼の書簡集と作品を繙くに如くはない。さて十五歳のヘルダリーンが、副牧師である彼の先生宛の書簡の中で、次のような懺悔と改悛の意を表明している。その言葉には当時彼が学んでいた僧院学校の敬虔主義的な厳しい教育の影響が看取される。

僕は自分の周りに誰かがいることに我慢できず、いつも独りになることばかりを欲し、まるで人類を軽蔑しているように見えました。ちょっとした対人関係も僕の魂をそれ自身の中から追い出しました。そのために僕はますます軽薄になるばかりでした。僕が賢明でありたいと望んだ時には、僕の心は陰険になりました。そしてちょっとした侮辱も、人々はひどく邪悪であり、悪魔的であって、彼らを用心しなければならないし、彼らに対するごく僅かな信頼も避けねばならないということを、確信させるもののように思われました。この人間敵視の性向に対して反対の行動をとろうとした時には、人前で気に入られようと汲々としましたが、神の前で気に入られようとは努力しませんでした。

十六歳のヘルダリーンは自らの性向を率直に、僧院学校の親友に打ち明ける。

僕には優しい心の傍らに、粗暴の悲しむべき芽も育った。僕はよく憤激する、訳も分からずに。そして僕の友に飛びかかってゆく、侮辱の気配が現れるか現れないうちに。

十七歳の少年はすでに、自己の悲劇的な未来を予感しているかのようだ。

こうしてあの箇所を思い出す毎に、僕はいつでもこう思う、僕がいつか恋人を失ったら、そして不幸な時間には大概そうなるように、僕が再び全くの愚物になったら、僕はただその箇所だけを読もう。

十九歳の神学生は母親に、神学校での劣悪な境遇を訴える傍ら、自己の気質にも言及している。

絶えざる不愉快、制限、不健康な空気、悪い食事のために、僕の身体はもっと自由な境遇にいる場合よりも、多分早く衰えるでしょう。あなたは僕の気質をご存じです。それは虐待、圧迫や軽蔑には全く向いていません。しかし相手がまさに気質であるだけに、どうしても克服することができないのです。

不愉快な神学校生活に嫌気がさし、一時退学しようかと考えるが、しかしそれを思い止どまる決心を母親に伝える。

僕は今いる境遇に今後も留まっていることに決心しました。あなたに心配をおかけするのではないかという考え、不確かな未来、愛する家族の人達から僕が当然受けた非難、希望に欺かれた時に、僕が自分自身でする激しい自責の念、僕の友人達の忠告、大嫌いな法律の勉学、弁護士生活に付き物のまやかし、他方では、静かな牧師生活の喜び、すぐどこかに地位の得られる見込み、家族の人達のためには四年間ぐらいは面倒なことも気にかけないで、愚行を笑っていようという考え、こういう一切のことが僕をとうとう、愛するママ、あなたに従うことを決心させました。

二十歳のヘルダリーンは友人の妹でもあった恋人に、間接的な決別の辞を述べるが、その冷静さには若者に特有の感傷がまるで感じられない。青春の情熱を断念する悲しみが欠落していて、どこか不気味である。

ルイーゼ、僕は率直でなければなりません。僕があなたにふさわしい地位に達するまでは、あなたに求婚すまいというのが、僕の固い決心です。僕はあなたを以前のあなたとの約束によって、あなたの心の選択だけによって束縛しておきたくないのです。あなたはすでに何度も僕に誓われたように、他の人を愛するなどということは、とてもできないとお思いになるでしょう。ですが、そのうち何人もの愛すべき青年があなたの心を得ようとするでしょう。何人もの尊敬すべき男があなたに求婚するでしょう。その中からあなたが立派な人物をお選びになったら、僕は喜んであなたにお祝いを言うでしょう。そうなって初めて、あなたは僕のような愚痴ぽくて、陰気で、病弱な友と一緒になったのでは、決して幸福になれなかっただろうということがお分かりになるでしょう。

二十一歳の青年は母親に、再度自分の決意とそうせざるをえない自己の性格を披瀝する。

ついでに申し上げておかなければなりませんが、僕は決して求婚すまいと、数年来固く決心しているのです。これは本気にお取りになってかまいません。僕の風変わりな性格、僕の気まぐれ、僕の計画癖、それに、僕の名誉心、これらはすべて、全く根絶しようとすれば、必ず危険を伴うような特性で、これらが僕に、静かな結婚生活、平和な牧師生活で幸福になることを期待させないのです。

二十二歳の若者が、すでに厭世の隠遁者のごとき口吻を漏らすのも尋常ではない。

僕の青春の情熱は、憂鬱の道を進んで来ました。その情熱が少し衰えたように見えるこの頃は、またふさぎの虫に取り付かれることも起こらなくなると期待しています。我々は当てのない願望や夢によって、多くの大切な時間を浪費するものですが、それが満たされないとなると、それこそ全く頭に来

てしまいます。ですが、あなたに賛成して頂けない事が、一つ残っています。そこに迎え入れられることが、世の人達の言うように、高い名誉だと思うような社会であっても、社会には愚かしさや、まやかしが付き物ですから、そう沢山の社会に順応することは、僕にはとても望めないのです。

二十三歳で神学部を卒業したヘルダリーンは、約束された牧師助手の職やその他の定職に就くことを嫌い、敢えて不安定な家庭教師の道を選ぶ。その理由は、母親への手紙によれば、次のようなものである。

僕が堅実な家庭を築く道を早くも今選ばねばならないとすると、それは自分を形成する道を断念しなければならないことと同様になるということは、僕にはずっと以前から分かっていました。母上はおそらく多くの場合と同じように、世間の人の言う「若くして定職につく」ことを誇りに感じる人々の例をもちだされることでしょう。しかし僕が自分の本質のために、今のところなおその本質の欲求を僕が知る限り、固定的な市民的な係累なしに、様々なものによって自分の精神と心を養うことのできるような状態を必要だと考えましても、それは不遜でも迷夢でもないと信じます。母上、とにかく良いものであろうと悪いものであろうと、自分の本性の固有の性質を知ること、境遇に流されずにできるだけ自己を保持すること、あるいは、この自分の本性の特質にとって有益な環境に身を置こうと努力すること、これは人間の義務なのです。それだけではなく、おっしゃるような方法で市民社会の一地位を占めることは、全く僕の信条に反することでもあるのです。

自分の本性に忠実であろうとする二十四歳のヘルダリーンは、六歳下の弟に自己の信条を開陳し、共に確固たる男子になろうと呼びかける。

欲望の拒否の下で、僕達の本性の中の常に安楽と快楽を求める利己性の克服と放棄の下で、より大きな活動圏が開かれるまでの静かな待機の下で、もしもそのより大きな活動圏が開かれなければ、自己の力を狭い活動圏に限るのも、それが良い結果を生み出すのならば、やはり偉大であるという確信の下で、人間のどんな弱点にも激昂させられず、人間のどんな虚飾の華麗さ、偽りの偉大さ、まがいものの卑下にも混乱させられることのない平静さの下で、ただ人類の幸不幸を思っての苦悩と歓喜、あるいは自己の不完全の自覚によってのみ乱される平静さの下で、人は男子に成熟する。自己の考えを正し、広くしようとの不断の努力の下で、あらゆる可能な主張や行為を判断するにあたり、あるいは正当性や合理性を判断するにあたって、絶対にどんな権威をも借りず、ただ自ら吟味しようとする確固たる原則の下で、自国や他国の似非哲学や暗愚な啓蒙思想、また各種の神聖な義務を偏見だと名付けて辱める賢明ぶった嘘つきなどの口車に決して自己の良心は乗せられはしないという原則の下で、しかし同様にまた、思索する精神、自己の品位と正義を人類という主体のもとで感じる人間を、やれ自由思想家だの自由への空騒ぎなどと名付けて断罪、あるいは笑い物にしようとする愚人、あるいは悪人によって自己を迷わせることはしないという神聖な確固たる原則の下で、こうした原則、その他にも沢山あるが、すべてこうした原則の下で、人は男子に成熟するのだ。僕達は自分に対して大きな要求をなさなければならぬ。心を共にする弟よ、僕達は自己の小さな価値を意識することでのうのうと楽しんでいる惨めな人々と同じにあってよいだろうか。

裕福な貴族家庭での住み込み家庭教師の仕事は、ヘルダリーンが当初考えていたほど楽なものではなかった。そしてその成果たるや、まさに労多くして功少ないものだった。教え子の凡庸な素質、幼児期の不完全な躾、その他諸々の悪癖などで、ヘルダリーンの努力も徒労に終わった。しかも一日のうちの半分が、忍耐以外には得るところのな

い授業でつぶれ、他の半分も、徒労感で自らの詩作や創作の仕事も阻害される羽目になった。そしておよそ一年の奮闘の後、万策尽きて心身の消耗をきたし、家庭教師を辞した。それから数カ月イェーナに滞在し、僅かな蓄えの中で、一日一食、ビール一杯という切り詰めた生活をしながら、ゲーテ、シラーと交流し、フィヒテの講義を聴講するなど、彼の教養を深めるためにもまた創作のためにも、大いに寄与するところがあった。その喜びを友人ヘーゲルに次のように報告する。

シラーは、親切に僕の面倒をみてくれて、彼の新しい雑誌『ホーレン』や、彼がこれから出す年刊詩集にも寄稿するようにと僕を激励してくれた。ゲーテと会って話をした。友よ、これほどの偉大さにこれほどの人間味を見出すのは、僕達の人生の最上の楽しみだ。ゲーテは、僕を非常にやさしく親切にもてなしてくれたので、僕の心臓は喜びにおどった。そして思い出すと、今でも僕の心臓はおどるのだ。

やがて当時のドイツの文化の一つの中心地であるイェーナを立ち去る時が来た。収入のない生活の困窮が第一の原因だが、ゲーテ、シラー、フィヒテら巨人の存在が、二十五歳の青年の精神の自由を圧迫したことも背景にある。郷里から出したシラー宛の書簡に、その間の事情が率直に語られている。

たとえ言葉によって伝わってこなくても、お側にいるだけで一個の精神の影響力をはっきりと感じ、その影響下にある自分を幸福と感じ得られること、また、お側を離れれば、遠ざかる一マイル毎に、別離を後悔せずにはいられないことは奇妙なことです。しかしまた、とりも直さずこのお側にいたために、僕は不安な気持ちにさせられることが多かったのでした。そうしたことがなければ、他にどんな動機があるにせよ、僕にとって、思いきって立ち去ることは困難であったでしょう。僕は常にあなたにお会いしたい誘惑を感じ、お会いすれば、いつもただ、僕はあなたに対しては無価値なのだ、と感ぜざるを得なかったのです。このような苦痛をもちまわっていては、必然的に自分の誇らしい要求も失うに至るだろうと感じました。僕はあなたにとっても重要なものたろうとしましたので、僕はあなたにとって無にひとしいことを、自分で悟らざるを得なかったのです。

表面上は卑下しつつも、この文面の裏に、誇り高い青年詩人の独立独歩の心意気が滲み出ているのではなかろうか。受けることなく、与えることができる、それが非凡な人間たちの財なのだとは彼も知悉していた。しかし人間関係で常に対等を目指す者は、たとえ裨益するところが大であろうとも、偉大な人物の影響を拒絶し、孤独な道を歩まねばならない。それがヘルダリーンの決意であり、矜持であった。なおその後も文通は断続的に続いたが、それ以降ヘルダリーンは二度とシラーにまみえることはなかった。

郷里に帰って半年ほど心身の疲労を癒していたヘルダリーンだが、いつまでも寡婦の母親のすねをかじってもいられなかった。彼は知人を介して、再び個人教授の道を探した。前の失敗でさんざん懲りた筈なのに、何故よりによってまた家庭教師なのか。ヘルダリーンの言い分はこうである。

今の世界においては、自分のもっている人間形成の願望とそのための骨折りを捨てずに逃げ込むことができる唯一の避難所は家庭教師の職業だけであると、考えておりませんでしたら、苦労のあげくに何度か惨めな失敗を重ねてきましたので、僕はもうそう軽率には再び教育のことには携わるまいと決心をしていたことでしょう。それほど、以前に教えていた時には、人間も自然も僕の裏目、裏目にと出たのでした。

やがて知人の仲介で新しい個人教授の口が見つかった。今度の雇い主は、フランクフルトの銀行家ゴンタルト家だった。かくて一七九五年の歳末、ヘルダリーンはフランクフルトに到着した。その時はまだ、どんな運命がこの地で彼を待ち受けているか予感してはいなかったであろう。ともあれ新年早々、彼はゴンタルト家の住み込み家庭教師となった。幸い契約条件も良く、生活上の束縛もなかった。教え子は純真で、素直な子だったし、およそ前轍を踏む危険もなさそうだった。こうして考えられうる最良の生活環境の中に、さらに錦上花を添える麗人がいた。

僕は新しい世界にいる。僕は今まで、何が美しいか、何が善良か、自分で分かっているつもりだった。しかしこの人を見てからは、自分の知識の一切を嘲笑したくなっている。友よ、この世界には、僕の心がそのそばに千年も留まることができる人がいる。その人に向かいあっていると、すべて僕達人間の理解力や思考力などというものは、自然の前ではどんなに幼稚なものか、ということが分かってくる。愛らしさと気高さ、平静と活気、精神と心情と容姿が、この人の中では至幸の全一をなしている。…君は、僕がどんなふうだったか、日常的なものがどんなに僕には厭わしかったかを、よく知っている。また僕がどんなに信仰を失って生きてきたか、自分の心の貧しさのためにどんなに惨めな思いを重ねてきたかを、よく知っている。もし僕にこの一人の女性が現れて、その春の光で、僕の生命を若返らせ、強め、明るくし、栄光でひたしてくれなかったとしたら、僕は今のように、鷲のように心楽しくなりえただろうか。僕には昔の色々な憂いが全く愚かしく、ちょうど子供に理解できないように、不可解に思われる瞬間が度々あるのだ。実際彼女の前で、儚い地上のことを考えるのは不可能なことが多い。だから彼女については僅かしか語れないのだ。…おお、愛する友よ、どうか幸福に。喜びを欠いては、僕達の心に真に永遠の美が栄えることはあるまい。大きな苦痛と大きな歓喜とは、最もよく人間を育成するものだ。…僕はもう書くことができない。これほどに幸福と青春を感じない時を待たなければならぬ。

夢の中でしか恋をし得ない宿命と自ら諦めていたヘルダリーンに、突如、運命の女神が微笑みかけた。それはゴンタルト家の若夫人ズゼッテこと、後のディオティーマである。時に彼女は二十七歳、女盛りの年齢だった。その容姿は、詩人の言葉を借りれば、次のようなものだった。

彼女は美しい。まるで天使のようだ。優しい、霊的な、天上の魅力をもつ顔だ。ああ、僕は千年間でも彼女のそばで至福な観察に耽って、自分と一切とを忘れていられるだろう。この姿の中の謙譲で静かな魂は、そんなにも汲み尽くし難く豊かなのだ。尊厳と優美、快活と厳粛、甘美な戯れと高貴な悲哀、生命と精神、これらの一切が彼女の中で、彼女の上で一体化して、一つの神的全体となっているのだ。

かかる女性と愛し、愛され、理解し、理解される幸福がどのようなものであるか。それは、ディオティーマ（ズゼッテ）の手紙を読めばおよそ推測がつく。そこには滅多にお目にかかれぬような感動的な愛情が吐露されているが、それは次のディオティーマの章で触れるので、ここでは割愛する。それにしてもかかる幸福にもまた、奈落の苦悩が待ち受けているとは、ギリシア悲劇に通暁したヘルダリーンも、よもや予想はしなかったであろう。人生の幸福には悲劇が不可避である。時あたかも世情不穏の時代で、まさに内憂外患の危機が迫っていた。内には家長による嫉妬の炎、外にはフランス軍侵攻による戦火。そして人々の冷酷な批判に傷つき苦しむのは渦中の二人、詩人と愛の女神ディオティーマである。この時、愛と別離の苦悩から逃れる避難所を

詩人に提供したのは、近くの町に住む友人だった。かくてヘルダリーンは住み慣れたフランクフルトを去り、近郊の温泉地ホンブルクに移り住んだ。しかしここもまた決して安住の地ではなかった。愛の葛藤と創作の苦悩が彼に付きまとって離れない。母親にその心境をそれとなく伝える。

今僕はこうして過去と未来の間で動揺しています。過ぎ去ったものへの愛着がまだ少し断ち切れず、気が滅入り、時には、自分の望むようには、希望をもって未来を見ることができなくなります。そして未来はまだあまりにも僕の目のとどかないところにあり、現在の目標へも、屈辱的な過去を忘れることができるほどには、まだ近づいていません。

神学校以来の親友には、もっと率直に告白する。

ああ、この世界は僕の精神を幼い頃から脅し付けて、僕自身の内部へ追い返したが、今なお僕は、依然としてこの苦しみに苛まれている。僕のような仕方で遭難したすべての詩人が、面目を失わずに収容されることのできる病院は存在している。…しかし僕は僕が最初にいだいた愛から、青春の希望から離れることはできない。詩神たちの甘美な故郷からただ偶然によって吹き流されただけの僕は、この故郷に決別して漂流するよりは、むしろ功業もなく没落する方を選びたい。

妹に対しては、家庭教師の職を辞め、創作に専念する立場への理解に感謝する一方で、自己弁明することも忘れない。

僕はまた隠遁者になった。おまえがそれに賛成してくれたのは、僕が理由なくそうしたのではないことを、僕はその閑暇を無為に過ごすのではなく、他人に負担をかけて自分に都合のいい状態をつくりだすのでもないことを、おまえは僕について十分推測することができたからなのだと思う。僕は利己心からこの仕事、この境遇をきめたのではない、それを信じておくれ。これは僕の生まれつきなのだ、運命なのだ。

この頃ヒポコンデリーに陥るほど深く悩んだヘルダリーンはしかし、そうした諸々の苦闘の中で、彼の唯一の小説『ヒュペーリオン』第二巻を完成させたばかりでなく、他にも多くの詩を書き、さらに悲劇『エンペドクレスの死』の構想を練っていた。フランクフルトとホンブルクでの愛と苦悶の日々が、まさにヘルダリーンを真に偉大な詩人に育てあげたのである。その意味でこの四年の歳月は厳父にして慈母であった。だがそうしたヘルダリーンの評価が定まるのは今世紀になってからで、当時はまだほとんど無名の詩人に等しかった。彼は文筆では食べられず、再び糊口の糧を何処かに求めねばならなかった。

一八〇〇年の六月、三十歳のヘルダリーンは郷里の母のもとへ帰った。しかし僅か十日ほど滞在しただけで、彼は友人達の招きでシュッットガルトに赴き、その地で若い人々を対象に哲学的な講演などをしながら半年を過ごす。翌年の一月、知人の仲介で、スイスの豪商の家庭の住み込み家庭教師としてに赴任した。白く輝くアルプスの峰々を眺めて感激しつつも、彼は一方で永遠の愛への不信と孤独の苦悩を弟に打ち明ける。

僕は信仰と観照の中でより高い生命を確保しておくために、疲れ切って死ぬほどまでに、苦闘したのだ。最愛の弟よ、このことを信じておくれ。そうなのだ。すべての点から推して、青銅の力をもった人間にして、ようやく耐え忍ぶ事のできるどんなことよりも、もっと圧倒的に作用する苦悩のもとで、苦闘したのだ。

それから僅か三カ月後、ヘルダリーンは雇い主の都合で一方的に解雇された。やむなく郷里に帰った彼は、今度はイェーナ大学のギリシア文学担当の講師の口を求めてあちこちに奔走するが、それも水泡に帰する。その年の末、四度目の家庭教師の地位を紹介されて、フランスのボルドーに旅立つ。出発前に友人宛に出した長い手紙には、異常な興奮と昂揚の気分が漂っている。その一部を以下に抜粋する。

ボルドーへは、あるドイツ福音教会派の家庭に、家庭教師兼私牧師として、来週旅立つことになっている。おお、友よ、世界は僕の前に、いつもよりひときわ明るく、ひときわ厳粛に横たわっている。そうだ。それはあるがままに、僕の気にいる。夏に「太古の聖なる父が、悠容たるみ手に紅の雲間から、祝福の稲妻をまく」時のように、僕の気にいるのだ。何故なら、神について観照することのできるすべてのものの中で、このしるしは僕にとってより抜きのしるしになったのだ。かつて僕は、新しい真理に、僕達の上や周りにあるものに関するすぐれた見解に、歓呼することができた。今僕は、自分が最後には、神々から消化しきれないほど多くのものを与えられたタンタロスのようになるのではないかと、心配だ。…それでは、ご機嫌よう、親愛な友よ。またこの次まで。僕は今惜別の思いで胸が一杯だ。長い間泣いたことがなかったが、やがて今祖国をおそらく永久に立ち去ろうと決心した時、切ない涙にくれるのだ。何故なら、この世で祖国ほど恋しいものがあろうか。しかし祖国の人々は僕を必要とはしないのだ。それでも僕はいつまでもドイツ人でありたい、あるほかはない。たとえ心の痛みと飢渇の苦しみが、僕をオタヒティの岸辺へ漂着させようとも。

かくてヘルダリーンは、一八〇一年の十二月十日、シュツットガルトを出発し、シュトラースブルク、リヨン、オーヴェルニュ高地をへて、翌年の一月二十八日、ようやくボルドーに到着する。その長い旅路がどんな辛いものだったか、母への手紙に記す。

この数日間、僕はもう春の中を、美しい春の中を旅してきました。しかしそのわずか前には、人々から恐れられているオーヴェルニュの雪におおわれた高地を、嵐と原野の中を、氷のように冷たい夜に、弾丸をこめたピストルを傍らにおき、ごつごつのベッドの中で―あのときは、僕もまた祈りました。それは今までの僕の生涯における最上の祈りでした。僕はあれをけっして忘れないでしょう。

ボルドーでの新しい生活は順調にすべりだしたかに見えたが、五月半ばに、ヘルダリーンは突如ボルドーを離れ、帰国の途についた。ほぼ一カ月後の六月中旬、彼は郷里の母の前に無残な姿を現した。その時彼の精神はすでに破綻の兆しを示していた。一体何があったのか。帰途に強盗に襲われるなど悲惨な目にあったようだが、真相は分からない。ただ帰国半年後に書かれた友人宛の書簡には、奇怪な文面が見られる。

長いことお手紙をしなかったが、その間僕はフランスにあって、荒廖としたもの淋しい土地をみた。南フランスの羊飼いたちや幾人かの美しい女たち、愛国的な迷いと飢餓の不安のうちに成長した男女。強力な元素、天空の火、人間たちの静けさ、自然の中における彼らの生活、そして彼らの限られた在り方と満足、それらが僕の心を休みなく強くつかんだ。そして人が英雄たちに倣って言う表現に従えば、僕はこう言うことができるだろう、アポロが僕を殴打したのだと。

最後の文言は原文では、Wie man Helden nachspricht, kann ich wohl sagen,daß mich Apollo geschlagen. である。筆者には残念な

がら、この文意は不可解である。アポロが僕を殴打したとはどういうことなのか。何か強烈な衝撃を受けた体験ではなかったか、と想像するが、その具体的な内容は全く不明である。いずれにしてもフランスでの滞在がヘルダリーンの魂に、何か決定的な転換をもたらしたのは確かなようだ。さてフランスから帰国して以来、ヘルダリーンは母の家に閉じこもり、友人達とも行き来せず、専ら詩作とギリシア悲劇の研究及び翻訳に精励した。しかしその間も精神の変調は進行しつつあった。一八〇三年七月四日付けの母親の手紙には、次のような文面が見られる。

残念なことでございますが、息子の嘆かわしい心の状態は、当人の手紙からお察しいただける通りでございまして、神様の思し召しのせいか、貴方様がご想像なさったり、不幸な友へのご愛情のあまりご希望なさったりなさるようには、まだ快方には向かっておりません。主のご加護のお陰によりまして、あの子が再び回復することもあろうかという願いだけが、私の気をひきたてるにすぎません。

右の手紙と同じ頃に、かつての学友シェリングがヘーゲルに報告している。

当地滞在中に僕が見た最も惨めな姿は、ヘルダリーンの姿だった。彼がシュトレーリン教授の推薦によって、自分の地位の義務について全く考え違いをしてフランスへでかけ、彼が満たすこともできないし自分の感じ易い心情に調和させることもできなかった要求をされたらしいので直ちに引き返してきた旅行、この不運な旅行以来、彼の精神はすっかり損なわれてしまって、今でもギリシア語の翻訳などの多少の仕事をある程度まではできるとはいえ、全般的には全く呆然自失の状態に陥っている。彼の姿は、僕にとっては恐るべきものだった。

ヘルダリーンの精神を鑑定したホンブルク在住のある医師が、一八〇五年四月九日に提出した報告書に、次のように記述している。

ヘルダリーンは一七九九年当地滞在当時、強度のヒポコンデリーに罹りましたが、この疾患はいかなる医薬によるも快癒せず、ヘルダリーンはそのまま当地を立ち去りました。その時以後昨年夏に至るまで、小生は同人について全く聞くところがなかったのでありますが、その夏、同人は再び当地へまいり、小生は「ヘルダリーンがまたここへ来たが、気が狂っている」という噂を耳にしました。昔のヒポコンデリーを想起すれば、この噂も小生にとってはさして驚くにたらないと存じましたが、小生は噂の真実性を確かめようと欲し、同人に面会を求めました。しかるに面会しますと、あの哀れな人物が非常に錯乱しているのを見まして、驚愕した次第であります。彼はまともな言葉で語ることはできませんし、絶え間無くきわめて激しい身動きをしておりました。小生は訪問を数回実行いたしましたが、その度ごとに患者はますます悪くなり、その言葉はますます理解しがたくなりました。ただ今では彼の精神錯乱は狂乱状態にまで進み、彼の言葉はドイツ語とギリシア語とラテン語のまじったもののように聞こえますが、全然理解できないようになっております。

この報告書の翌年、友人によってヘルダリーンはかつて学んだテュービンゲンの町に連れて行かれ、大学の精神科に入院したが回復の見込みがなく、次いで当地の指物職人の家庭に預けられ、そこで一八四三年六月七日に病死するまで、三十六年間を精神の冥暗の中で過ごした。一八二二年七月三日にヘルダリーンを見舞ったある若き詩人が記している。

彼は気が狂ったままますでに十六年間過ごし、今は五十歳くらいになっている。ときおり正気を取り戻すこともある。近頃は叫んだり暴れたりすることはなくなったが、正常なところはない。すでに六年間というもの、彼は一日中何もせずに部屋の中を行ったり来りしながら、独り言をつぶやいている。夜にはたびたび起き上がって家の中を歩き回り、時には戸外へも出る。……私たちは別れを告げた。階段を下りるときに私たちは開かれた扉からもう一度、彼が行ったり来たりしている姿を見た。ある恐怖の念が私の全身をふるえさせた。私の心には、檻の中を行ったり来たりしている野獣の姿が浮かんだ。私たちは茫然として家から飛び出した。

ヘルダリーンの最後については、こう伝えられている。

六月初旬に私は彼を訪れて、いつもとほとんど変らない様子を見た。まもなく日暮れになると、彼は突然不快を感じ、楽になろうとして開いた窓のそばへ歩み寄り、永いあいだ美しい月夜の光景を眺めていたが、これが彼の気をいくぶん休めたらしかった。ところが彼の疲労はまして、彼はベットに身を横たえた。そこで彼はまもなく、死が近づいてくるのを感じて、手を組み合わせて祈ったが、その言葉のなかには彼の精神の目覚めていることを推測させるものはひとこともなかった。彼は午前四時に、迎えにやった医者のくるのも待たずに死んだ。一八四三年六月七日である。解剖の結果、死因は進行した肋膜炎と判明したが、他にもかなりの心臓硬化と脳水腫があるのがわかった。最後の症状が前にあった脳器官の炎症の結果であることは、推定として報告された。これがどの程度の根拠のある推定か、私には判断できないが、ヘルダリーンの精神病の最初の原因はどうしても心的な理由に求めなくてはならないであろう。いつもあの不幸な人物の身辺にいた人々は彼のために、兄弟のためのように泣いた。…故人の頭には豊かな月桂樹の冠が飾られた。彼の遺体には、おりからはじまった悪天候にもかかわらず、親戚のほかに多数の学生と数人の教授がつき従った。…棺が墓穴におろされたとき、曇っていた空が明るみ、太陽がまことに優しい日差しを掘り開かれた墓の上にそそいだ。それは自然が私たちとともに営んだ解放の祭りであった。ここに遺骸を葬られた高貴な天才は束縛する夜の闇からのがれ去って、天空の不滅の青春が彼岸の会堂から彼に向かって合図を送ってきたのだ。

（第三章及び第四章は次回に続く）

Zusammenfassung

Hiromi Tsutsumi

Hölderlin war ein Romantiker, obwohl er durchaus zu keiner romantischen Schule gehörte und kaum Umgang mit den Frühromantikern hatte. Er ging allein einen stolzen und einsamen Weg. Außer im Kreise seiner wenigen Freunde wurde er weder von seinen Zeitgenossen gelesen, noch von ihnen als Dichter anerkannt. Nach seiner geistigen Umnachtung hat man ihn aufs neue entdeckt und zugleich angefangen, seine dichterischen Leistungen vor die Öffentlichkeit zu bringen. Und dann, erst mit dem Anfang des 20. Jahrhunderts bricht eine neue Zeit an, in der man Hölderlin in der Geistesgeschichte historisch zu betrachten und über ihn ein richtiges Urteil zu fällen weiß. Heute ist sein Weltruhm als einer der größten deutschen Dichter unbestreitbar.

Hölderlin wird oft Dichter der Liebe und der Natur genannt. Der Hauptgrund dafür besteht wohl darin, daß er seit der Kindheit von seiner Familie, vor allem von seiner Mutter und Großmutter, besonders geliebt und zugleich umarmt von der gesegneten Natur seiner Heimat, ruhig aufgewachsen war. Später tritt Liebe und Natur als das wichtigste Thema in sein Bewußtsein. Hinter diesen zwei Begriffen stecken auch Liebe zur Mutter, Liebe zur Frau, Liebe zur Erde und Liebe zur Natur insgesamt. Kurz gesagt, liegt im Grund seiner Dichtung immer das heikle Verhältnis zwischen Mensch und Natur. Davon zeugen seine Gedichte und Briefe.

In vorliegender Arbeit wird Hölderlin in vier Kapiteln folgenderweise behandelt, wie Begabung und Gemütsart, Schicksal und Vorgefühl, Hyperion und Diotima, Moral und Stilgefühl. Von diesen vier Gesichtspunkten aus möchte der Verfasser das Wesen des Dichters ergründen.

(Fortsetzung folgt)